

リレートーク

協同による仕事おこし・地域福祉事業所

田中羊子（労協センター事業団）



センター事業団というのは、20年位の歴史があるのですが、日本ではこういう働き方がまだほとんど知られていません。「働く者が働く者のままで協同して仕事をおこす」ことが日本の社会の中で事業として継続していけるんだ、ということを実践の事実で示そう、市民の目から存在感を持って映る事業の規模と、協同組合で働くからこそこういう働き方ができるという内実をつくることを目的につくった協同組合組織です。病院の清掃や生協・農協の倉庫内作業、病院や養護学校の給食、保育園の運営などさまざまな仕事に取り組んでいます。

そういった仕事に携わってきた私たちが、特にこの3～4年、地域でヘルパー講座を開催し、そこで出会ったヘルパーの方たちと介護・福祉の事業所を全国に立ち上げていっている、といったお話をしたいと思います。

本格的に介護・福祉の事業に取り組んだのは98年からでした。日本の経済が本当に悲惨な状況で、私たち協同組合も1円でも安いところにオーナー（委託元）が委託先を切り替える、いつ仕事を失うか分からない、頑張っても委託単価は上がるどころか下がっていく。そんな中で出口を見失って仕事も劣化していく、という中で、どこに展望を見出そう

かと悩んでいたところに、ちょうど介護保険が導入されようとしていました。もちろん、委託の事業で精一杯信頼される、誇りの持てるいい仕事をするというのが基本ですが、オーナーの意思一つで自分たちの運命が左右される働き方ではなくて、国の制度と直結して地域と直に結んで個々の家庭や高齢者の人と直接仕事ができる、そういう新しい「仕事おこし」を今までの事業の上に作り上げていこう、ということを決めました。

清掃の現場で働いている60歳を過ぎたおじさんおばさんたち、生協の物流業務で働く若者たち、給食の現場で働く調理師・栄養士の人たちが、地域を走り回って自分たちの手でヘルパーの養成講座を開き、自分たちと一緒に介護の事業所を立ち上げようよ、と受講生たちに呼びかけました。

これまでは、職安などで人の募集をして、集まった人に「ここは雇われて働くんじゃないんだ」と説明して、協同労働の現場をつくってきました。ところが、現在働いている仲間が、その仕事を維持しながら地域に新しい仕事を創造していく、その時に私たちが協同組合で働いていることの喜びや意味を受講生に正面から伝え、一緒にやろうと呼びかけていく、そんな変化が全国に広がっていま

す。

今、センター事業団では全国で60ヶ所の介護・福祉の事業所が立ち上がっています。ヘルパー講座を受講される方たちも以前は女性が多かったのですが、最近の雇用情勢を反映して20～40代の男性も1/3から半分を占めるようになってきています。自分たちの力で地域の側を向いた介護の仕事を協同組合で立ち上げよう、という思いに応じて参加される人が広がっています。

東京都と鹿児島県では自治体からヘルパーの講座に仕事おこしの講座のカリキュラムを加えた失業者向けの訓練講習を受託し、そこから事業所が立ち上がっています。東京ではホームレスの人たちを対象に、その自立支援を目的としたヘルパー講座を行い、その仕事おこしをしようとしています。精神障害者や知的障害者の作業所の皆さんがホームヘルパーがその分野でも位置付けられ、ケアされる側からする側にまわって地域の人と一緒に介護の事業所を建てたい、そんな流れも広がっていているところです。

介護保険にはいろいろな欠陥や心配もあるけれど、私たちはそこに可能性を感じています。福祉が特定の弱者救済の制度だったものが、介護保険制度に変わることで全ての市民が支えあう普遍的なものに変わりました。措置制度の時には、決定権は行政の側にあった。それが介護保険になると利用者本位、市民の側にあることが明確にされた。行政や社会福祉法人に独占されていたサービスが民間に移った。このことによる弊害はあるでしょうが、協同組合やNPOなど私たち市民がボランティアではなく事業の担い手としてこの分野に大量に参入することや受講生が自分たちの手で仕事をおこすことが可能なのです。

一方で、介護保険開始後3年経って、残念なことに「在宅重視」「住み慣れた地域で支えあう」ことが理念だった介護保険が逆の方向

に進もうとしています。その時に、市民の手でつくった協同組合の事業所だからこそ、どんなにしんどくても「自立支援」を高く掲げて、住み慣れた家や自然環境の中で自分らしい生をまっとうすることを支援する。そのことができるのは、その地域を愛し、そこに住み続けている市民自身である、と考えています。

ケアの仕事というのは、誰であろうとその人たちが本来持っている潜在力を信頼して、それが可能な限り発揮し続けて生きることを応援する、つまり、人間の本来ある自立を支援する仕事だと思っています。だとすると、その仕事の担い手たちは、より自立し主体的であり、協同という関係で結ばれているからこそ、相手に対して本当の意味でケアできるのではないかと思います。まだまだ、知識も技術も不足していますが、この姿勢を貫き勉強を続けていけば、それにふさわしい担い手になれる、それが協同組合にはなれるのではないかと思います。

この協同組合が持つ「人間観」は人間の主体性を信頼します。その人間が持つ本来の力が最大限発揮できる、そういう働き方を根底に置いています。労働者は首を切られたり職を失った時に、行政や企業にすぎらなくても雇用されなくても自分たちの持っている力を地域で役立つように生かす力は持っています。その主体性に可能な限り依拠して、ストレートに発揮できる働き方をつくっていかうと思いつけてきました。今の時代は閉塞感が強く展望をもてない状況ですが、「つくる」という側に一歩踏み出すと、人や地域との関係で自分が変わり、生きている実感が持てるそんな世界があるように思います。協同労働という働き方で地域に関わり、主体的な納得のいく働く場を一緒につくっていかうというメッセージを発しつつづければ、と思います。